



帯広畜産大学

Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

第40回アメリカ生殖学会 (40th Annual Meeting of the Society for the Study of Reproduction) への参加及び発表

| | |
|-----|---|
| 著者 | 笹原 希笑実 |
| 雑誌名 | 帯広畜産大学後援会報告 |
| 巻 | 36 |
| ページ | 52-53 |
| 発行年 | 2008-03-31 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1588/00003338/ |

第40回アメリカ生殖学会（40th Annual Meeting of the Society for the Study of Reproduction）への参加及び発表

笹原 希笑実

畜産学研究科畜産衛生学専攻動物医科学講座（博士前期課程1年）

1. 目 的

40th Annual Meeting of society for the study of reproduction（SSR）は世界で最も高レベルかつ大規模な生殖科学に関する学会であり、トップレベルの研究者が多数集まる。その世界的な舞台において、これまで自分が行ってきたウシ卵巣機能、特に、黄体機能に関する最新の研究成果を世界へ紹介すること、そして、各国の様々な研究グループと積極的に意見交換を行うことが最大の目的である。

2. 期 間

平成19年7月18日～平成19年7月28日

3. 場 所

サンアントニオ（アメリカ合衆国 テキサス州）

4. 内 容

サンアントニオは、市街に設けられたリバー・ウォークの存在にちなんで「米国のベニス」と呼ばれることがある。リバー・ウォークでは、熱帯性の植物に囲まれた遊歩道が整備され、自然保護と産業の活性化を調和させた都市開発の成功例として、世界の都市づくりの模範となっている。街の一角に佇むアラモ砦（The Alamo）は、テキサス州サンアントニオにあるかつての伝道所と要塞の複合施設で、現在は博物館になっている。もともと聖域と周辺の建造物を包含していたこの複合施設は、地元のインディアンがキリスト教へ改宗した後の教育のために、18世紀にスペイン帝国に



リバー・ウォークの遊覧ボート



アラモ砦

よって建設されたものであるという。

この街は、今なおスペイン文化とメキシコ文化の伝統を色濃く残しており、どこへ行ってもスペイン語が響き、異国情緒があふれていた。異国の文化を学ぶには最高の地だった。また、ゆったりとした時間が流れており、学会開催の地としては最適だと感じた。

学会は、リバー・ウォーク沿いに佇む Marriott San Antonio Rivercenter で行われた。今回は、私自身も発表するということでとても緊張していたが、実際に学会が始まると楽しくてそれどころではなかった。普段、大学で研究しているだけでは触れることのできない多くの研究発表を目の当たりにし、自分の専門分野はもちろんのこと、それ以外の研究にも触れることで、実験の進め方や考え方などを学ぶことができた。研究に対する視野が広がったと感じている。また、口頭発表ではプレゼンテーションの方法も勉強になった。画像やアニメーションを上手く活用し、聴衆を惹き付けるようなプレゼンテーションや、文字のみのスライドで演者が伝えたいことが伝わって来ないようなものもあった。また、楽しそうに発表している演者の研究は魅力的に思え、同じ内容を発表するにしても、プレゼンテーションのやり方一つで、その研究が活きるかどうかが決まると思った。これからは、相手に理解してもらうためにはどうしたら良いかを常に考え、楽しくプレゼンテーションをしていこうと思う。

私自身の発表では、研究者が次々と見に来てくれた。今回私は、黄体退行過程において一時的に引き起こされる血流域増加現象の生理的意義とその現象を引き起こすと考えられる一酸化窒素 (NO) の役割について発表し、様々な意見をもらうことができた。「素晴らしい研究だね、このモデルで更に詳細な遺伝子やタンパク発現を見てみたら？面白いと思うよ。」などと興味を持ってもらえたことが嬉しかったし、「NO を病的な状況、つまり黄体腫に直接投与したら黄体は退行するの？」と思いきや



らぬ質問を受け、戸惑う場面もあったが、互いに想像を膨らませながら話せたことが楽しかった。しかし、すべての人が私の扱っている現象や物質について知っているわけではないため、噛み砕いた言葉で説明しなければならない場合が多く、その時は自身の勉強法を改めなければならないと感じた。自分の語学力の無さを痛いほど思い知らされ、思いを伝えられないもどかしさを感じる場面も多かったが、他の研究者の方々が、私が理解できるようゆっくり話してくれ、私の言葉に耳を傾けてくれる姿には感動した。英語が苦手だからと逃げることなく、何としてでも伝えようとする気持ちは大切だと実感すると共に、これから更に勉強しなければならないと思った。英語を思い通りに話すことができたなら、こんなにも多くの研究者と自由にディスカッション出来るのかと思うと、今後のやる気につながった。

今回の SSR は、海外での学会発表という自分にとって大きな挑戦だった。そして、異国の文化・歴史を学ぶと共に、研究に関する知識や技術を多く吸収することができ、充実した実りあるものであった。最後に、この度の学会参加に多大なご支援をいただいた帯広畜産大学後援会に心より感謝いたします。

キーワード：SSR, サンアントニオ, 黄体